

俳句

【小学1年生・2年生】

特選 ひまわりがそらをみあげてわらってる

佐和山小学校2年 野口 蒼翔

(評) ひまわりはお日さまの方をむいて大きな花をさかせます。「そらをみあげる」「わらう」この言葉に、作者のしぜんを感じるころのゆたかさ、ものを見つめる気もちのやさしさが伝わってきます。すてきな一句ができましたね。

(彦根文芸協会 林 尚子)

特選 てつぼうにとまってみるあかとんぼ

佐和山小学校1年 稲出 星来

(評) 「あかとんぼ」は秋の季語です。作者が、あかとんぼになり、うんどうじょうの子どものすがたをながめているのです。小学1年生が、あかとんぼになりきって俳句を詠むことにおどろかされます。すばらしいです。あかとんぼのそばで、子どもたちの明るくはずんだ声が聞こえてきそうです。

(彦根文芸協会 林 尚子)

特選 もうすこしあともうすこしふゆやすみ

佐和山小学校2年 川藤 愛李

(評) 「もうすこし」「あともうすこし」と、おなじことばを二回繰り返していることから、作者にとつて、特別なことがまつているふゆやすみなのでしょうね。クルスマス、お正月、おたん生日なのかしら。それとも、コロナで会えなかったおじいちゃんやおばあちゃんにあえるのかしら。読み手が色いろとそうぞうするのも楽しい句です。

(彦根文芸協会 林 尚子)

特選 もが山までどんぐりひろい楽しいな

亀山小学校2年 石居 歩真

(評) 「もがやま」は「茂賀山」と書きます。生活科の学習で、学校の近くの山へ行ったのでしょうか。場所をはっきりさせたことで、友だちといっしょに、どんぐりをひろう作者のすがたがより生き生きとかんじられるいい句になりました。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 たまいれでいっばいはいっただうんどうかい

佐和山小学校1年 徳邑 咲菜

(評) 「うんどうかい」は秋の季語きごです。かごをめがけて、ひろった玉をなげ、時間いっばいがんばったうんどう会だったのでしょうか。大かつやくした作者のすがたが、「いっばいはいっただ」の言葉から見えるようです。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 きょうだいでいるこたつはあったかい

城東小学校1年 佐渡 知紗

(評) 冬の季語「こたつ」です。なかのいいきょうだいなのですね。こたつはあたたかいです。いっしょにはいると心まであたたかくなります。きょうだいのわらい声が家中にひびいていることでしょう。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 はのうしろせみのぬけがらふしぎだな

稲枝東小学校2年 大西 詩楽

(評) はのうらがわまでよく見ましたね。こしをひくくして、いや地面にしゃがみこんで、せみのぬけがらを見つけたのでしょうか。「おや、こんなところに！」という、はっけんした時の作者のおどろきが伝わってきます。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 がまのほはさわったかんじスポンジだ

城東小学校2年 尹 清蕙

(評) 俳句は、見て、聞いて、さわって、においをかいで、味わって表現すると、作者の思いが読み手にしっかりとつたわります。作者は、じつさいに「がまのほ」にふれて、そのかんしよくを自分でたしかめたのです。すばらしい一句になりました。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 お月さまはずかしがらずに出ておいで

城南小学校2年 前田 茉帆侶

(評) 「月」は秋の季語きごです。お月さまがとうじょうする絵本のせかいに入りこんだようです。今、お月さまは雲にかくれて見えませんが、かわいいこえが聞こえたら、お月さまが出てくるような気がします。「はずかしがらずに」は八音ですが、スツと声に出して読めてしまいます。「に」を書かなくても意味はつながり七音になります。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 あめんぼうスーイスーいとすすんでる

城北小学校2年 中島 知音

(評) 「あめんぼう」をよくかんさつしてできあがった一句です。すすむ様子ようすを「スーイスーイ」とひょうげんしているところは、まるで動画をみているようです。また、この句には、「SU」と発音する文字(「ス」「ス」「す」)が三回使われていて、心地よく耳に入ってきます。

(彦根文芸協会 林 尚子)

準特選 だいこんをぬこうとしたらこけちゃった

平田小学校2年 大地 瑞希

(評) おもわず教科書にのっている「おおきなかぶ」を思いうかべてしまいました。 「だいこん」は冬の季語。 作者がこけてしまうほど、大きな大きな「だいこん」だったのでしょう。 こけてしまって、はにかんでいる作者の様子よすがが目にくかびます。 ありのままをすなおにひょうげんできました。

(彦根文芸協会 林 尚子)



佳作 あささむいもうすこしだけねていたい

佐和山小学校2年 北川 優奈

佳作 とかげがねひなたぼっこできもちいい

亀山小学校1年 田中 大貴

佳作 ゆきだるまままとつくってたのしいな

佐和山小学校1年 枝澤 萌夏

佳作 かまきりのかまがこわくてみてるだけ

佐和山小学校2年 南 瑛大

佳作 おっきいなほれたよわたしのおいもだよ

佐和山小学校2年 田丸 裕理

佳作 みつけたぞバッタにバッタのっている

城東小学校1年 立石 慈音

佳作 あおむしもかおをだしたよおいもほり

城東小学校1年 屋敷 明音

佳作 つららがねおっこちてきてびっくりだ

平田小学校2年 山 瑞希

佳作 かたつむりはっぱにのっておちそうだ

平田小学校2年 川原園 里菜

佳作 いちょうのはちょうのかたちにはいているな

稲枝西小学校1年 疋田 歩

佳作 どんぐりにどんぐりむしがはいります

稲枝西小学校1年 上田 彩実

佳作 赤色のじゅうたんみたいひがな

亀山小学校2年 田中 大耀

佳作 あきまつりみんなでおどるたのしいな

亀山小学校2年 北村 祥嗣



入選 あかとんぼどこへいくのかしりたいな

稲枝西小学校2年 福沢 ちか

入選 すずむしがリンリンなくよいいこえだ

亀山小学校1年 永江 真子

入選 きれいだな空いっぱいの赤とんぼ

亀山小学校2年 中村 仁穂

入選 ころころところがるどんぐりかわいいね

佐和山小学校1年 北川 紗菜

入選 さつまいもほっくほっくでおいしいな

佐和山小学校1年 川村 萌乃佳

入選 あきまつりおいしいにおいあふれてる

佐和山小学校2年 吉村 凜菜

入選 いねかりでザクザクかるときもちいい

佐和山小学校2年 大前 香穂

入選 あかとんぼわたしのゆびにとまったよ

佐和山小学校2年 藤本 夏美

入選 かきのみがそだってきたよたべたいな

佐和山小学校2年 谷沢 麻友

入選 うんどう会ポーンポーンつけてたのしいな

城西小学校2年 村田 珠希

入選 まんまるいおつきみだんごおいしいな

城西小学校2年 中村 美遥

入選 かぶとむしたたかうすがたかっこいい

平田小学校2年 堀内 優

入選 まんげつがきらきらひかっ
てきれいだな

城北小学校2年 森 陽より

入選 まつぼっくりかわいかざり
つくりたい

稲枝西小学校1年 表西 真穂

入選 あきのひにみんなでたべる
おべんとう

佐和山小学校1年 本登 さくら

入選 うんどうかいはしっておう
えんたのしいな

城西小学校1年 竹元 絵利子



【小学3年生・4年生】

特選 じいちゃんといねかりをしてうれしいな

平田小学校3年 森戸 照稀

(評) おじいさんといねかりをしたのですね。かまを使っていねをかる仕事はたいへんです。きつとおじいさんは長い間お米づくりをされて来られたのでしよう。おじいさんがやさしい眼差しまなざで見守っておられる様子が目にうかんできます。ずつと大切な思い出になりそうですね。

(彦根文芸協会 堀田 民)

特選 つゆくさと見上げた空が同じ色

旭森小学校3年 松近 呼春

(評) 九月ごろ、畑や道ばたなどでよく見られるつゆ草。花の色は青で、朝早く咲き、昼ごろはしおれてしまうとても短い命です。そんなつゆ草を目にし、ふと見上げた空が同じ色だと気づいたのですね。青色と表現しなくても「同じ色」で、つゆくさの花がきれいな青色だということがわかります。つゆ草と空の青色が絵のように広がっているようです。

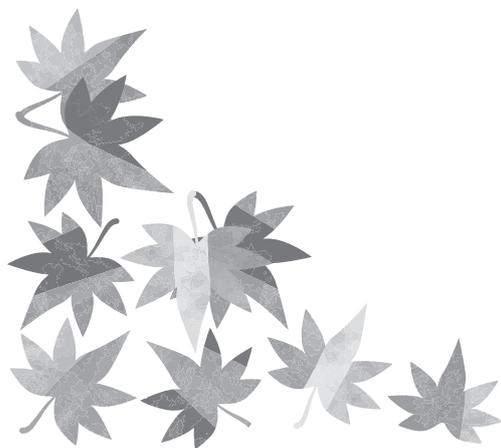
(彦根文芸協会 堀田 民)

特選 学校でもみじが赤いきれいだな

平田小学校3年 永尾 衣織

(評) 学校にはいろいろな木が植えられていて、季節ごとにそれぞれの木を楽しむことができます。さくらの花、「新緑」のころのやわらかい緑、あたり一面の万緑ばんりよく、そして紅葉こうよう。学校のもみじが赤く色づき、とても心を動かされたのですね。その感動を素直すなおに表現できました。学校「で」を「の」にするといいですね。

(彦根文芸協会 堀田 民)



準特選 秋の山紅葉が揺れて火のようだ

城東小学校4年 米沢 縁

(評) 秋になると山の木々が少しずつ赤や黄色に変わり始め、美しいけしきを楽しむことができます。目にされた山も紅葉が真っ赤に色づき、それが風にふかれて揺れているんですね。その様子がまるで火のようだと感じたところが素晴らしいです。「ようだ」と表現することで紅葉がどのように揺れているのかがわかりやすいです。

(彦根文芸協会 堀田 民)

準特選 太陽が東にのぼるせみが鳴く

稲枝東小学校3年 牧野 輝

(評) せみは朝日がのぼる頃、一番に鳴いてくれます。地中に八年間いると言われているですが、地上では十日ほどの短い命です。朝の光が輝いてまぶしく、きつと嬉しかったのでしょうか。大きな「太陽」と小さな「せみ」の自然をつないで句のつくり方が上手です。このように、感じたこと、不思議なこと、発見したことを「季語」を忘れずに詠んでください。

(彦根文芸協会 堀田 民)

準特選 なつのほしピカピカひかるほしのそら

亀山小学校4年 池山 白虎

(評) 空気がすんだ秋の星空もきれいですが、暑い一日の終わりに見上げる夏の星空もかくべつです。明るくよく光る星、あまり目立たない小さな星、発する色もちがうたくさんの星が輝いています。そんな無数の星が広がる世界を楽しんでいる作者の様子が目にうかんできます。習った漢字を使って表すといいですね。

(彦根文芸協会 堀田 民)

準特選 ぎっくざく落ち葉だ落ち葉ぎっくざく

亀山小学校3年 辻井 玲奈

(評) たつぷり積もった落ち葉の上を歩いたり、走ったり、ジャンプしたりしながら友達と遊んだのでしょうか。笑い声が聞こえてきそうです。「ぎっくざく」で落ち葉を踏みならす音が、リズムよく表現できています。「落ち葉だ落ち葉」のくり返し、「ぎっくざく」のはじめ(上の句)と終わり(下の句)の使い方がとても上手ですね。落ち葉遊びがまだまだ続いていることがわかります。

(彦根文芸協会 堀田 民)

準特選 お月見ですすぎが揺れるいい気持ち

城北小学校4年 吉田 彩乃

(評) すすぎ、月見だんご、芋などを縁側や部屋でお供えするお月見は、準備が大変ですが、わくわくしますね。空にはきれいなまん丸のお月様、風に揺れるすすぎ、とても気持ちのよいお月見になりましたね。お月様もきつとにっこりです。「すすぎが揺れる」で動きのある句になりました。

(彦根文芸協会 堀田 民)

佳作 さつまいもほかほかけむり黄色いな

城西小学校3年 林 柚希

佳作 おちばの葉しゃりしゃり音きれいな

城北小学校4年 寺居 陽葵

佳作 秋になりたくさん本を読みたいな

亀山小学校3年 前田 結菜

佳作 もみじ落ち葉っぱのふとんできている

城北小学校4年 藤田 直矢

佳作 青一位俊足バトン運動会

稲枝東小学校4年 藤野 弥優

佳作 いけのなかすずしくみえるつくりだき

河瀬小学校4年 大里 風幸

佳作 ハロウィン大会がはじまるうれしいな

城西小学校3年 谷 心結

佳作 やつときたとても楽しい夏休み

亀山小学校3年 久木晴一朗

佳作 すず虫やいろんな虫のこもり歌

城西小学校3年 中川 閃

入選 クリスマスねている間にプレゼント

亀山小学校3年 岩瀬 蓮

入選 すずむしがりいんりいんとないている

稲枝東小学校3年 野口 昂紀

入選 お母さん作ってくれたよくりごはん

城北小学校3年 勝居 海翔

入選 ブドウがりいっぱいとれたよいいにおい

城北小学校3年 藤原 柚希

入選 アイスクリームあまりの一本じゃんけんだ

平田小学校3年 佐野 碧哉

入選 まんげつだうさぎがつきでもちをつく

平田小学校4年 三浦 麻桜菜

入選 運動会自分の全てを出し切るよ

城北小学校4年 山口 愛加

入選 母と父お月見だんご作ろうよ

城西小学校3年 高畑 文乃

入選 ふんすいがわき出してくるキラキラと

城南小学校3年 栗本 桜奈

入選 あつあつでおいしいおでんほかほかだ

城北小学校3年 門間 環

入選 もみじがりみんなでいって楽しいな

城北小学校4年 西崎 丞

入選 お正月みんなでまわすこま大会

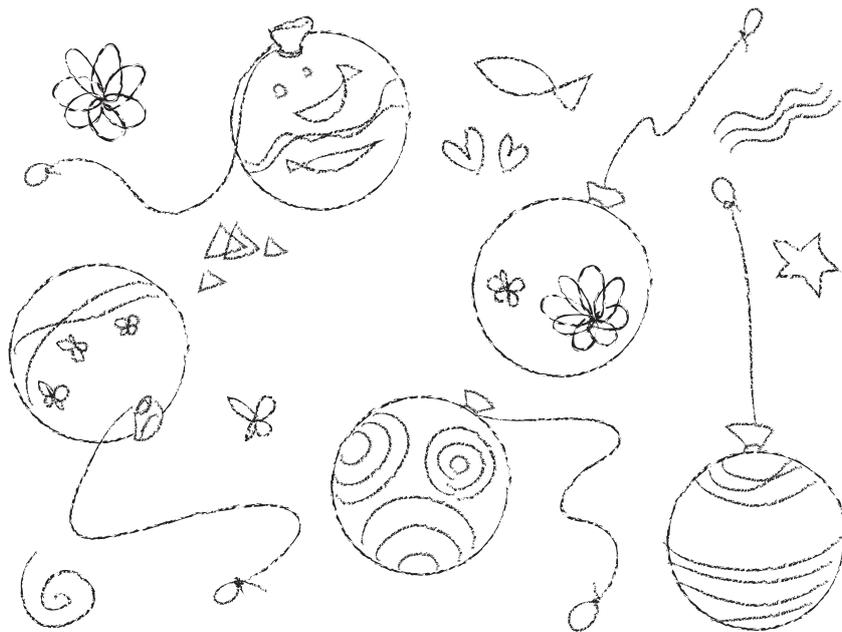
稲枝北小学校4年 柿添 美月

入選 くりおちてとげとげからこんには

稲枝北小学校3年 西村 真志

入選 夏祭りヨーヨーすくいたのしいな

城北小学校3年 水上 律希



【小学5年生・6年生】

特選 すべり台落ちて笑って夏の空

河瀬小学校5年 宇野 琥太郎

(評) 公園でのすべり台遊びを楽しんでいたのでしょう。「落ちて」で危ないと思わせ、次の「笑って」でああよかった大丈夫だったんだと安心させる一連の言葉の運びが巧みですね。そして、季語「夏の空」がとてもそう快な感じを与えています。笑ったあとの視線が空に向かい情景が広がりました。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 迷いこみホタルを外に逃がす夜

亀山小学校5年 田中 漣

(評) 一時は生息数がかなり減ったと危ぶまれていましたが、近年また、見られるようになったホタル。成虫になりわずか二週間足らずの短い命です。そんなホタルがたまたま迷い込んで発光していたのでしょう。作者が暗がりには逃がしてやったホタルをやさしく見守っている様子が目に浮かぶようです。季語は「ホタル」(夏)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 稲かりだざくざく切って束作り

稲枝西小学校5年 柴谷 季衣来

(評) 「稲かり」は秋の季語です。黄金色に実った穂が頭をもたげ、いよいよ収穫が始まります。さあ、稲刈りだという作者の意気込みが伝わってくる作品です。鎌で刈り取られる株の音「ざくざく」がリズムよく聞こえてくるようです。刈り取りから束作りまで一気に段取りよく進む様子が十七音にうまくまとめられています。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 自転車で走り落葉とすれちがう

河瀬小学校5年 小泉 多慧

(評) 季語は「落葉」(冬)です。自転車で「走り」から少し速めに漕いでいたのでしょう。そんなとき、落葉と偶然すれ違った、その一瞬の出来事を見逃さずたくみに表現しています。「すれちがう」の五音から落葉がよほど近くに落ちて来たことがわかります。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 秋の夕土でよごれたユニフォーム

河瀬小学校5年 青木 颯大

(評) 「土でよごれた」からおそらく野球の試合、もしくは練習後のユニフォームを詠んでいるのではないかと想像します。スライディングなどでユニフォームはよごれてしまったけれど、よくがんばったという充実感が一日の終わり「秋の夕」(季語)に表れているようです。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 衣替え兄のおさがり丁度良い

城東小学校5年 松尾 泰慈

(評) 「衣替え」は夏の季語です。俳句では厚手の衣類を薄手のものに着替えることをいいます。お兄さんが着ていた衣類が大切にしまわれ、今度は作者が着用する番となったのです。実際身につけてみると、大きくもなく小さくもなく、丁度よい大きさ。おさがりを気に入っている様子が伝わってきます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 牡丹雪手のひらに落ちとけてゆく

城北小学校5年 柳田 夏臣

(評) 雪といえば冬景色の象徴といえますが、その量や降り方には様々な違いがあり、雪のつく季語もいくつかあります。「牡丹雪」は比較的気温が高い時に、雪の結晶がくっ付きあつて牡丹の花びらのように大きな雪片になって降ってきました。作者が牡丹雪を手のひらに受け、ゆつくりと溶けていく様子を楽しんでいる様子がうかがえます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

特選 のぼりぼうてっぺん三人夏の空

河瀬小学校5年 落合 いろは

(評) この三人は登り棒が得意で仲良しなのでしようね。すると登りきつてつっぺんで雑談をしたり、校庭を見下ろしたり、三人だけの楽しい時間を過ごしているのではないでしょう。頭上には真っ青な夏の空が広がり、三人の気持ちよさが伝わってくるようです。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 秋空をドラの音ならし進む船

佐和山小学校5年 橋本 尚哉

(評) 青い空、青い水面にドラの音がひびきわたるいいよ出航の時。学習船「うみのこ」に乗船されているのでしょうか。力強いドラの音に、これからどんな活動が展開されるのかワクワク、ドキドキする気持ちが重なっているように感じます。岸壁から少しずつ離れ、船がゆつくり進んでいく様子が目に浮かびます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 えびすこうためてたちよきんつかいきる

佐和山小学校6年 岡田 匠輝

(評) 「えびすこう」はお店の人が商売繁盛を願って行う「えびす神」の祭り、秋の季語です。彦根でも多くの店が並びとてもぎやかなもおし事です。そのえびすこうで、こつこつと貯めてきた貯金をすべて使いきったというのですから、よほど楽しみにしていたのでしょう。「つかいきる」という五音に作者のいさぎよさが表れています。できれば習った漢字を使って表現するといいですね。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 ひさしぶりいとこと遊ぶ冬休み

河瀬小学校5年 大下 奏愛

(評) 新型コロナウイルスの感染拡大で行動が制限され、親せきや知り合いともなかなか出会えなかった期間がありました。ようやく制限が緩やかになり行き来できるようになりました。「ひさしぶり」という五音に長かったなあという思い、出会えてよかったという喜びが込められています。冬休み、思いっきりいことこの楽しい時間を過ごすことができましたでしょうね。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 彼岸花思い出すのはおじいちゃん

城陽小学校6年 江畑 博翔

(評) 秋の季語「彼岸花」は「まんじゅしやげ」とも言われ、お彼岸のころに茎を伸ばしその頂に真っ赤な花火のような花を咲かせます。その彼岸花におじいちゃんとのどんな思い出があるのでしょうか。想像を巡らしながら味わう句です。おじいちゃんとの思い出を大切に、彼岸花を眺める作者の優しさが伝わってきます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 がんばったプールのそうじピッカピカ

城南小学校5年 千葉 賢造

(評) 六月になるといよいよプールが始まります。プール内やプールサイドは一年分の汚れで高学年にとっては大変な作業。「がんばった」の五音でプール内を行ったり来たりしながら汚れを懸命に落とす様子が目に浮かびます。「ピッカピカ」ですっきりきれいになったプールの気持ちよさが作者の心情と重なってとても歯切れのよい響きです。季語は「プール」(夏)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 このにおいわたしの好きなくなりごはん

若葉小学校6年 澤 陽愛

(評) 秋の木の実の代表の一つ「栗」。焼いても炊いても香ばしいかおりがします。「このにおい」と限定されているところから作者はこれまでも栗ご飯の匂いをかぎ、味わってきたのでしょうか。さらに、「このにおい」を最初に位置づけ「何の匂いだろう」と読み手に想像させる句の組み立て方がうまいですね。栗ご飯(秋の季語)のあまいにおいがただよってくるようです。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 風にのりキラキラひかる田のいねが

稲枝東小学校5年 奥村 花

(評) 秋になると稲の穂が色づき始め頭をもたげます。時折、風がふいてくると田んぼは波のようにゆれて黄金色の穂がきらめき、とても美しい姿をみせます。もしかすると、朝露にぬれていたのかもしれないですね。作者はその光景を目にとめ、「キラキラひかる」と表しました。つい見逃してしまう自然の出来事です。その美しさを十七音にうまく表しました。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 真つ青な空に消えたよシャボン玉

河瀬小学校5年 星谷 莉音

(評) 次々に生まれ、日光に照らされ七色に輝くシャボン玉。ふわふわと漂いながらやがて中空で消えてしまします。そのシャボン玉の行く先をずっと目で追っている作者。青く澄んだ空に「消えたよ」と呼びかける表現が読み手に優しく伝わってきます。季語は「シャボン玉」で春です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 がんばったみんなでいねをかりきった

高宮小学校5年 北川 理乃彩

(評) 一面の稲田に鎌を持ち、一株ずつ刈り取っていく作業は大変です。慣れない作業、慣れない足場に手間取りながら、みんなで力を合わせ、一株残らず全部刈り取った、そのやり終えたあとのすがすがしい気持ち「かりきった」の五音に込められています。習った漢字はできるだけ使うといいですね。季語は「稲刈り」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 音楽会込める気持ちや秋高し

河瀬小学校5年 江見 慎

(評) 運動会が終わると音楽会の本格的な練習が始まるのではないのでしょうか。何度も何度も練習し、心をついにみんなで演奏を作り上げ、いよいよ本番に臨む。それまでのいろいろな思いを詰めて演奏する作者の思いが「気持ちや」の「や」に強く表れています。その演奏が晴れ渡った秋の空高く響いていくようです。季語は「秋高し」です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 星のようなキキョウの花はきれいだな

城南小学校5年 門野 愛生

(評) 秋の七草の一つに数えられるききょう。花は釣りかね状態で先が五つに分かれています。そのききょうを目にした時、星のようだととらえた作者の目の付け所がいいですね。例えることでその姿、形をわかりやすくすることができます。ついで、きれいだなと通り過ぎてしまいう花もよく観察すると新しい発見があります。季語は「ききょう」(秋)です。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 いいにおいたどっていけばきんもくせい

佐和山小学校6年 清水 美来

(評) 秋の中頃になると独特の香りを放つ「もくせい」(秋の季語)。花は普通橙黄色で、これが「きんもくせい」です。通学路や公園、近所の庭など花が咲くと少し離れていても、かすかににおいがただよってきます。一体どこから来るのか、作者はそのにおいの先を追い「きんもくせい」だと気づきました。探究心が旺盛ですね。できるだけ漢字を使つて表現するとわかりやすいです。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 早く次ページをめくる手夜長し

高宮小学校5年 堀田 悠介

(評) 今、手にしている本がよほど興味深く、おもしろいのでしょうか。「早く次」の五音でその先を読まずにはいられない、早く知りたいという作者の気持ちが伝わってきます。季語は「夜長し」(秋)です。秋の夜長、好きな本の世界にひたる様子が目に浮かびます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 秋の夜ドアをとんとんハロウィンだ

城西小学校6年 野上 拓真

(評) 日本でも近年盛り上がっているイベント「ハロウィン」。作者も近所の家々を、お菓子^{かし}をもらいに回ったのでしょうか。ドアをたたく音「とんとん」とハロウィンがリズムよくひびきます。どんなお菓子が用意されているのか楽しみをしている様子が「とんとん」の軽やかな音で伝わってきます。

(彦根文芸協会 北川 則子)

準特選 フワフワと落ち葉の上をかけぬける

亀山小学校6年 大谷 奏斗

(評) 季語は「落ち葉」で冬です。美しく紅葉していた木々も公園や街路、林など様々な落ち葉で埋めつくされます。そんな積もった落ち葉の上をかけ抜けるのはなんと気持ちのよいことでしょう。足に伝わる布団のようなふわふわ感を感しながら、自然をいっばい楽しんでいるんですね。

(彦根文芸協会 北川 則子)

佳作 ゆきのやまくまもねむったさみしいな

城南小学校5年 薛 佑希

佳作 流れ星かなうといいな願い事

稲枝東小学校5年 岩佐 向日葵

佳作 寒い時サッカー楽しいあたたまる

稲枝東小学校5年 生田 大翔

佳作 秋になり木も葉も空も変わったな

稲枝北小学校5年 寺井 悠

佳作 ひらひらと黄色いちようが舞い降りる

亀山小学校5年 田中 煌大

佳作 いいにおい部屋にただようサンマやき

亀山小学校5年 辻 萌衣夏

佳作 クラブ終え風あたる日の涼しさよ

河瀬小学校5年 疋田 咲楽

佳作 ブランコを飛び越え鬼に追いつかれ

河瀬小学校5年 土田 まひろ

佳作 楽しみだ荒神山でくりひろい

稲枝北小学校6年 真野 桜子

佳作 夜の空見上げて見ればオリオン座

城南小学校5年 林 亜矢花

佳作 手をのばしとどくといいな秋の空

城南小学校5年 石橋 明莉

佳作 稲かりはけっこうかゆいわけである

稲枝西小学校5年 藤井 陽輔

佳作 風がふく秋近きことの知らせかな

稲枝西小学校6年 安居 花道

佳作 なんだろな運動会のお弁当

稲枝東小学校6年 川口 睦世

佳作 手をあらう水が冷たく手がまっか

亀山小学校6年 四家 百香

佳作 新しい服を買ったよ夏の朝

河瀬小学校5年 中川 大志

佳作 十五夜だ月の光が目染みる

城西小学校6年 坂本 めい

佳作 秋の夜六時に真っ暗すぎる

佐和山小学校6年 松井 優奈

佳作 風で舞うかれ葉はまるで鳥のよう

佐和山小学校5年 早野 友貴

佳作 祖父からの新米届き兄気づく

城陽小学校6年 高須 千夏

佳作 近づくといきなり動くアブラゼミ

稲枝西小学校6年 山本 航大

佳作 虫の声電車の音でかきさえる

稲枝東小学校6年 橋山 歩武

入選 運動会雲押し上げる熱気あり

城北小学校5年 木原 寧音

入選 くりひろいむしに食われたものばかり

城南小学校5年 井上 奨太

入選 きれいだな月夜がてらす水の上

金城小学校6年 千田 眞悠子

入選 もみじの葉夕日と同じあかね色

佐和山小学校5年 平尾 快翔

入選 ひらひらともみじとともに露天ぶろ

佐和山小学校6年 西村 葉奈

入選 百合の花きれいな白でじょうひんだ

佐和山小学校6年 小野 千穂

入選 栗のイガ手袋してもチクチクだ

城西小学校6年 藤井 拓未

入選 路地裏に秋のこもれ日光さす

城東小学校5年 佐々木 喜且

入選 運動会バシッと決めた一人技

城東小学校5年 吉田 愛那

入選 満月が励まし照らす帰り道

城東小学校5年 田辺 嘉音

入選 起きたときぞくつとしたな寒い朝

城北小学校6年 武田 ゆゆ

入選 ふんわりときんもくせい香りかな

城陽小学校5年 小畠 結

入選 ストーブをとりあいするよ子どもたち

稲枝東小学校5年 浦谷 歩希

入選 どんぐりにころころとにげられた

亀山小学校6年 今村 遥柊

入選 母きたらうるさいからと蟬のせい

城東小学校6年 北村 魁斗

入選 河川敷黄色に染まるセイタカソウ

城東小学校5年 山下 藍士

入選 ハロウィンの仮装を選ぶ日が来たな

城西小学校6年 間宮 和香

入選 秋の空ドラゴンみたい雲うかぶ

城西小学校5年 辻 悠翔

入選 すす虫の自まんの声が鳴りひびく

城西小学校5年 清水 琉太

入選 栗拾いいがを開ければからっぽだ

佐和山小学校6年 大村 權斗

入選 水遊び冷たい水が光りだす

城南小学校5年 尾田 煌希

入選 風が吹き秋の訪れ知らされる

金城小学校6年 北方 歌莉奈

入選 二階からいいにおいくるサンマ臭

佐和山小学校6年 矢吹 康祐

入選 銀杏をレンジでポントとくさかった

佐和山小学校6年 藤本 歩里

入選 帰り道ポケットの中秋の風

亀山小学校6年 吉川 結菜

入選 目をつむり夜空に願う天の川

城東小学校6年 円城 遥彦

入選 スイカわりドキドキするよ当たるかな

城南小学校5年 永田 煌凜

【中学生】

特選 虫籠が鳴るよ自然のオルゴール

河瀬中学校1年 増田 羽和

(評) 虫籠で鳴っている虫の声をオルゴールにたとえ「虫籠が鳴る」と表現された詩的感覚、そして中七の「鳴るよ」の「よ」の感動詞の用い方も的確で、みずみずしい感性に満ち溢れています。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

特選 ぼつぼつと雨音響く秋の声

鳥居中学校3年 永松 朱星

(評) さあざあと激しく降る雨音でなく、ぼつぼつと、ものさびしげに降る雨音に秋の気配を感じている作者。秋の声という季語の意味をよく理解して詠まれました。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

特選 しやりしやりと暑さも削るかき氷

稲枝中学校3年 門脇 昊土

(評) 上五の『しやりしやり』の擬音語が効果的で「暑さも削る」とは巧く表現できました。この句の場合、季重なりは許容の範囲です。「かき氷」が季語で「暑さ」はワキ(演劇という脇役)季語を詠む言葉として詠みとりました。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 最後の夏思いを全てラケットに

稲枝中学校3年 柴田 夢叶

(評) 下五にラケットとあるのでバドミントン・テニスなどのクラブ活動だろうか。「思いを全て」に勝利を目指し三年間培ってきた向上心と決意がうかがえます。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 ねこじやらし秋限定の玩具だよ

彦根中学校3年 北川 愛

(評) ねこじやらしは道端、空き地等、どこにでも生えている雑草で「えのころぐさ」とも呼ばれ、子どもたちは穂を抜いて頬を撫で合つて遊びます。その穂を「秋限定の玩具」とは巧く表現しました。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 刻一刻せまる卒業時早し

南中学校3年 石谷 莉来

(評) 三年生も三学期が近付くと入試勉強などで何かと忙しく日々を過ごし、一日一週間、一か月と月日が経つのが早く思われるものです。急ぎ足で過ぎてゆく時間と卒業を迎える淋しさがよく分かる良い句に仕上がりました。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 夏祭屋台の味は二年ぶり

河瀬中学校1年 松本 実旺

(評) コロナ禍で自粛していたイベントも一部で解かれ二年ぶりに再開したらしく、久しぶりの屋台で美味しそうに何かを食べている様子がうかがえます。

コロナ禍の収束を願う作者の気持ちが「二年ぶり」で伝わってきます。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 体育祭君の笑顔とダンスの手

稲枝中学校3年 藤野 優希

(評) 体育祭でのダンスの一コマ。

中七と下五に楽しそうに踊っている人、また、見ている人の和やかな光景まで想像できます。何か甘ずっぱさを感じる一句です。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

準特選 サイダーの中に広がり光る泡

南中学校2年 堀田 梨央

(評) サイダーはラムネと共に清涼飲料水の一種で、夏の季語になります。

中七、下五にサイダーの特性を細かく観察し素直に表現しているところに惹かれました。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)

佳作 麗らかや心が和む散歩道

南中学校3年 加藤 侑春花

佳作 大声が大気に響く体育祭

稲枝中学校3年 吉田 玲欧

佳作 炭酸水花火のようにはじけ飛ぶ

河瀬中学校1年 森下 琴風

佳作 梅雨明の山の緑もあざやかに

南中学校3年 榎 琉斗

佳作 思い出とともに色付く秋の山

彦根中学校3年 上田 葵唯

佳作 秋晴の畑に眠る地の恵み

鳥居本中学校3年 小山 太誠

佳作 青い海僕の視線が泳いでる

南中学校3年 筏 啓士朗

佳作 秋涼しみんなで食べるにぎりめし

彦根中学校3年 高橋 隼

佳作 体育祭協力し合うパートナー

稲枝中学校3年 中村 莉々佳

佳作 グラデーション車窓のむこう秋の色

河瀬中学校1年 高木 みなも

佳作 炎のよう真っ赤に燃える彼岸花

彦根中学校2年 伏木 いろは

佳作 友達と仲を深める夏祭

河瀬中学校1年 平居 椿

入選 蝉の声遠くなんてはまた聞こえ

稲枝中学校3年 瀧川 華子

入選 クリスマスはかない恋の鐘が鳴る

稲枝中学校3年 井口 純哉

入選 たのしみは元気に育ったトマトたち

彦根中学校2年 水野 結萌

入選 風すずし新幹線が走りさる

彦根中学校2年 福田 剛基

入選 秋の風感じて歩く中山道

彦根中学校2年 中田 莉緒

入選 いちちょうの葉まだ緑色秋はじめ

彦根中学校3年 澤 虹美

入選 秋風に流されながら坂登る

彦根中学校3年 謝賀 柚希

入選 秋の山川の流れと風の音

鳥居本中学校3年 原 大智

入選 歓声だ一位狙うぞ運動会

河瀬中学校1年 上柳 結加

入選 秋風に心をゆらす自然の灯

彦根中学校3年 山下 雪輝

入選 秋の空見上げ感じる季節感

鳥居本中学校3年 有澤 和真

入選 もみじがり赤に黄色に色づける

河瀬中学校 匿名

入選 織姫よ私もそこに行きたいな

河瀬中学校1年 山田 悠月

入選 秋涼し仲間と感ずる山の風

彦根中学校2年 長澤 来幸

入選 彦根市の町をみわたし秋さがし

彦根中学校3年 北川 虹瀬

【総評】

(小学生の部)

俳句部門にたくさんの応募をありがとうございました。小学一年生〜六年生の子どもがそれぞれの段階で、俳句の基本(五・七・五の日本語のリズムと一つの季語を入れること)を覚えながら自分の言葉を増やしてゆく過程を見せていただきました。指折り数えてできたその作品を評価してあげるのは大人の役割と思われまます。低学年、中学年にはよく似た発想の作品が多く見られ、高学年になると知識と共に語彙も増えて俳句らしくもなりますが、理屈っぽい作品も見られます。このようなたくさんの作品の中から、個性的できらきら光る言葉(詩のかげら)を見つける作業は楽しくもありました。残念ながら今年選ばれなかった人も来年また応募してみてください。一年の成長は俳句の言葉の成長ともなります。次に選者の先生方の感想を記します。

(低学年) 夏休みの子ども文芸ワークショップに参加して俳句を学んだ子どもたちに良い成果がみられました。

(中学年) よい作品が多く選ぶのに迷いました。みんなとってあげたところでした。

(高学年) 感性をはたらかせ、人とは違った着眼点で言葉の構成にも工夫し、いろいろな題材を選び句作りに挑戦してみましよう。

以上

(彦根文芸協会 勝又 千恵子)

(中学生の部)

昨年と比べ今年作品数が減少したものの並大抵ではない七三九句の中から計三六句を選ぶという選考作業は見直すこと幾度か、慎重に慎重を期しました。

今年の作品の傾向として、

・擬音語(実際の音をまねて言葉とした語)

・擬人法(人でないものを人に見立てる技法)

・比喩(物事の説明に類似したものを借りて喩えること)

を有効に用いて上手に表現できている、感性豊かな作品が多く見受けられました。これらは本人の努力はもちろんのこと、家庭でのお父さん、お母さん、また学校での先生方のご指導によるものと推察します。

今回、選ばれなかった作品の中にもたいへん惜しく思われる句が幾つもありました。

その中の一つに「万緑やパラグライダー天高く」があります。この句は琵琶湖畔でよく見かける光景で、うまく写生されていますが、夏の季語「万緑」と秋の季語「天高く」の季重なり(季語が二つあること)が残念に思いました。この句、もし下五の「天」が「空」で「空高く」であれば上位にいただいております。一字の大切さ、推敲の大切さを分かってほしく、あえて書かせてもらいました。

来年は彦根城、琵琶湖など地域に根差した名所旧跡を詠んだ俳句も少しは見たく、楽しみにしております。

(彦根文芸協会 成宮 伯水)